

令和 6 年 6 月 9 日現在

機関番号：14101

研究種目：奨励研究

研究期間：2023～2023

課題番号：23H05075

研究課題名 ICT機器を活用することによって深い真正な学びへと誘う救命教育授業の事例的研究

研究代表者

長井 直己 (Nagai, Naoki)

三重大学・教育学部附属小学校・小学校教諭

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 480,000 円

研究成果の概要：本研究は、深い真正な学びへと誘う救命教育の授業デザインを構想して実践をし(研究目的1)、授業実践から、ICT機器を活用することによって深い真正な学びへと誘うことができる効果を事例的に明らかにする(研究目的2)ことを目的とした。「救命の連鎖(厚生労働省, 2015)」のうち、「早期発見と通報」と「第一次救命処置(心肺蘇生とAED)」だけでなく、「二次救命処置と心拍再開後の集中治療」までを取り扱うことを特徴とする授業デザインが必要であること、授業実践によって第一発見者の救命処置の重要性に気付くことができ、ICT機器を活用することによって深い真正な学びへと誘うことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究によって明らかになったことは、一般市民が目撃した中で、一般市民に処置された傷病者が58%に留まるこの国において(総務省消防庁, 2021)、適切に心肺蘇生を行うことができる実践力のある国民を育成することへの貢献、未曾有の大災害が起きた際、救急車両が全ての場所に向かうことは困難であることから、家族の命を守るという意味が含まれる自助の行動ができる国民を育成することへの貢献、学校事故に対して取組の実効性を高めることが求められている中(文部科学省, 2024)、学校で心停止が起きた際に、迅速に応急手当をすることができることへの貢献につながることを示唆している。

研究分野：教育学

キーワード：心肺蘇生 真正な学び

1. 研究の目的

- (1) 深い真正な学びへと誘う救命教育の授業デザインを構想して実践をする。
- (2) 授業実践から、ICT 機器を活用することによって深い真正な学びへと誘うことができる効果を事例的に明らかにする。

2. 研究成果

(1) 救命の連鎖を授業の構成として取り扱う単元デザイン

児童の意味理解を促しながら心肺蘇生教育を行うためには、心肺蘇生法を行う児童(第一発見者)が社会的視から理解することが重要だと考えた。

「救命の連鎖」(厚生労働省, 2020)は、「心停止の予防」「心停止の早期認識と通報」「一次救命処置(心肺蘇生と AED)」「二次救命処置と心拍再開後の集中治療」の 4 つの輪で構成される。第一発見者は、「心停止の早期認識と通報」「一次救命処置(心肺蘇生と AED)」を行う。その後、救命士・看護師・医師といった医療従事者が「二次救命処置と心拍再開後の集中治療」を行う。しかし、第一発見者となる一般市民の多くは、医療従事者が「二次救命処置と心拍再開後の集中治療」をどのように、何を行っているか知らないであろう。医療従事者が「二次救命処置と心拍再開後の集中治療」をどのように、何を行っているのかという知識を得ることで、第一発見者が医療従事者に何を繋いでいるのかが明確になり、第一発見者が行わなければならない行動の意味を考えられるのではないかと考えた。

そこで、表 1 の単元デザインを設定した。第 2 時と第 3 時は医療従事者と協働で授業を行った。特に第 2 時は、社会的視点から心肺蘇生教育の意味理解を促すことができるような位置づけとした。

表 1 単元デザイン

	第 1 時	第 2 時	第 3 時
テーマ	救命活動は自分事	命のリレー	心肺蘇生法
学習課題	桐田明日香さんは、どうしたら助かったか。	友達を助けるために、誰が何をするか。	実際に倒れた人を助けられるか。
学ぶ内容	胸骨圧迫を行うことや AED を使用することは誰にでもできる。	第一発見者は、医療従事者と同じく心肺蘇生を行っている。	正しい順番で心肺蘇生法を行う。

第 2 時は、事前課題として、人が倒れてから時間がかかるほど命を救うことができないことを伝えた後、「下校中に一緒に帰っていた友達が倒れた。その友達は心拍が停止しているかもしれない。すぐ傍に人はいない。」という状況を説明し、救急車到着前と救急車到着後に分けて、友達を救うために、誰が何をするかをグループで考えさせた。常に一人ひとりの考えを共有させながらグループで考えさせたかったため、タブレット端末を使用し、Google スライドを用いた。

第一発見者が応急手当を行った後の救急車到着後に医療従事者が行っていることを理解させるために、タブレット端末を使用して、救急車内や病院内で医療従事者が行っているビデオを視聴させた。

(2) 社会的視点から意味を理解する児童

360° カメラで撮影した授業実践を質的に分析した。事前学習では、多くのグループが、救急車到着前に第一発見者が行うべきことを記述することができていた一方で、救急車到着後は、医療従事者が行うことについて記述することができていなかった(図 2)。

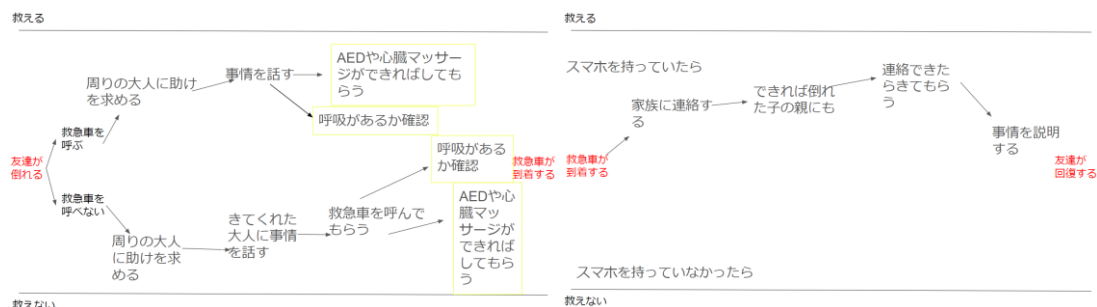


図2 事前学習の児童 1 グループの Google スライド(左が救急車到着前、右が救急車到着後)

授業で医療従事者が救急車内と病院内で行うビデオを視聴させた後、児童から「胸骨圧迫」、「電気ショック」、「人工呼吸」、「電気ショック」を行っているという気付きがあり、第一発見者と同じ心肺蘇生をしていることに気付いた様子が現れていた。また、「だから命のリレーなのか。」

という発言があり、第一発見者が心肺蘇生を行う意味まで理解している姿が現れていた。このことにより、事前学習でタブレット端末を使用して救急車到着前と救急車到着後に分けて、誰が何をするのかを Google スライドに記述させたこと、医療従事者が救急車内と病院内で行っているビデオを視聴させるという ICT の活用が深い真正な学びに誘えたことが明らかになった。

(3) 自分の分身を心肺蘇生を行う状況に派遣したり戻したりする児童

A 児の各授業の感想は、「AED の使い方や死戦期呼吸などのサインがわかった。『皆で命を救う』ということがわかった。一人では救うことができないかもしれない。」(第 1 時)、「命のリレーはしっかりと繋げていくために私たちも協力しないといけないということがわかった。自分たちには難しいからと言ってしないのはよくないと思った。」(第 2 時)、「AED がやり方を教えてくれるから正しく覚えることができて良かった。実際に倒れた人がいたら、自分と周りの人と協力して助けたいと思った。」(第 3 時)であった。

A 児は、第 1 時に「一人で救うことができないかもしれない。」という言葉を使いながら、状況に身を置きながら考えている。第 2 時は、「自分たちには難しいからと言ってしないのはよくない。」という言葉を使いながら、自分に言い聞かすような書き方をしている。第 3 時は、実際に倒れた人がいたら、協力して助けたい。」という言葉を使いながら決意を表している。佐伯(1978)は、分身(コピト)を人、もの、ことへと派遣し、その分身に派遣先の世界の制約の中で様々な体験をさせ、そして彼らに体験報告をさせ、それを統合した時に理解が生まれるという「擬人的認識論」を述べている。A 児は、第 1 時と第 3 時に、救命活動を行う状況に分身を派遣させ、第 2 時に自分の思いを出している。これは、分身を派遣させたり、分身を自分に戻して自分事として考えたりすることで、A 児の理解を促していると捉えることができる。

第 2 時の ICT を活用して社会的視点から意味理解を促す授業は、A 児にとって、分身を派遣させた第 1 時の自分を意味理解によって、心肺蘇生をしなければいけないのだと自分に言い聞かせる役割をしたと言え、これも深い真正な学びに誘ったことが原因であると捉えられる。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

—

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
----	--------